まにふいくみやはか Fukapon

+ したういじふ、しんもらうから

したいこと、してもいいから+

Fukapon

2012年2月12日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2012 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>

純は笑うでもなければ泣くでもなく、淡々と言葉を発した。「ごめんなさい、お兄ちゃんのせいで。ごめんなさい……」

そして沈黙。

みなが黙った。

暗澹たる空気に支配された部屋。

しかし彼女は、もう一度思い切った。

「三人で、恋人しよっか？」

純も菜々も、目を見開いて顔を上げる。

立ち上がった翔子は、もう問わない。

「純ちゃんと恋人同士になれて幸せだから。みんなで幸せになった方が、素敵だよ」

彼女の笑顔はまだ、作り物だった。

それでも気付いたらみな、笑っていた。

あとがき

おはようございます。眠い眠い眠い寝たい。

先週に続き、前日から夜を徹して書いております。今回は書き出したのが夜、さらに遅くなりました……。

とゆわけで、今日の打ち上げは参加できそうにありません。ごめんなさい。

日頃の寝不足に加えて、今週は収益営業でお休みなし。土日がないのでありません、土日があるから僕たちは！

ああ、餃子食べながら眼鏡で盛り上がりたかった。あいういっしゅあいわーあにーと！

さて、今回のお話。「1」は先週の新刊『したいこと、していいから』そのままです。でも「2」は前回書ききれなかったってわけじゃないんです。ええ、思いついてたらもっと早く……。カラッとしたラストになるはずだったんですが、疲れのせいでしょう。どんよりになっちゃったよ。しかも妙に短く。ごめんね、ちゃんと書いてあげられなくて。なお、お兄ちゃんが何したかはお察しください。囁まれるとどーゆーことになっちゃうのかしら。えっと、次は五月のコミティアかな。ああ、すぐ来ちゃうんだろなあ。

二〇十二年二月十二日、今週も二十四時間営業の作業場より。

1

「私たちって、付き合ってるんだよね？」

「えっ？ うん、付き合ってるよね？」

「だよね、だよねー」

「どうしたの？」

彼の視線が教科書とノートから、目の前の彼女へと移される。

「あの、さ……」

彼女彼女、恋人同士。ローテールを挟んで並ぶ彼。少女は二人の関係を噛みしめてはにかむ——ようには見えなかった。

彼女は左手にあったシャーペンを机に置き、彼に正対する。

互いに背筋を伸ばし向かい合う様は、まさに初々しいカップルだ。

「どう言ったらいいかわからないから、ストレートに言うよ？」

「うん。それで、何を？」

エアコンの温風が、耳を隠すこともない彼女の髪を揺らした。

「別れよう、私たち」

「ええっと、ごめん。俺もどう言ったらいいかわからない……」

自分の部屋に来た彼女が、まさか別れ話を切り出そうとは。

彼に予測できようはずもない。年頃の男の子が、恋人の女の子を自宅に招く。彼の頭の中は、実情と正反対を描いていたに違いない。

「そ、そうだよね、わからないよね」

青天の霹靂に返す言葉のない彼に向かい合ったまま、彼女は取り繕うように間を繋いでいる。

「あ、突然言われても困るよね。理由！ 別れたい理由、言おう

か？」

さも核心を突いたと言わんばかりの彼女だったが、明らかに外している。

彼が言葉を失っている原因は、そんなところがない。しかし彼には、己の胸中を表現するだけの余裕などない。

「あ、ああ、そうだな」

目を泳がせ、心ここにあらずの返事が精一杯だった。

彼女の方も余裕がないことは変わらない。

昨晩、たくさん練習した言い訳すら彼女には残っていない。発せられたのは、剥き出しの想いだけだ。

「純ちゃんが、好きなの」

剥き出しにもほどがある。いきなり実名入りで真相が明かされる。

強烈な告白に、彼の反応は一択だ。驚くほかない。

「『純ちゃん』って、中江純なかえまら、なのか？」

「うん」

「俺の妹の、純？」

「うん」

そう、驚くほかない。

ついには言葉を発することすらできない。

そんな彼とは対照的に、彼女は淡々と言葉を紡ぐ。

「ごめん。でも、隠したくなかったから。……もう、出て行くね」
 テーブルの勉強道具を鞆に放り込んだ彼女は、スッと立ち上がった。

その凜とした姿を、彼は見たことがなかった。彼の知っている彼女は、こんなことを言う少女ではなかった。

「最後に、キスとかエッチとか、しとく？ いいよ、期待してたでしょ」

「べ、別に俺は……」

彼女は言い淀む彼に背中を向けて、本棚の奥に腕を突っ込む。

「隠さなくていいのに」

抑揚のない言葉とともに彼女の手から放たれたのは、趣味がわかりやすいアダルトビデオだ。

「私、縛られるの嫌いじゃないと思う。でも、バイバイ」

彼女は扉を開け、部屋を出た。

階段を下りる音は、彼の耳にも届いた。

リビングでは階上の惨事など知りようもなく、今日もいつも通り。

「やっほー、純ちゃんっ」

静けさを壊すのが彼女であるところも、全くいつも通りだ。

「翔子さん、いらしてたんですね。こんばんは」

「お邪魔してまーすっ」

——ポフッ

彼女、小牧翔子はソファに飛び込み、純の隣を陣取る。

視線上、文庫本の上にくっくと首を出してきた翔子に、純は本を返して表紙を見せる。

「あ、このシリーズ、新刊出たんだ」

「はい。どうぞ」

本を譲られた翔子は、上体を起こしてバラバラとめくる。

同時に純は、翔子が退くのを予想していたかのようにソファから立ち上がった。

「コーラねー」

翔子の声を受けて、純は冷蔵庫を開ける。

コーラとオレンジジュース。彼女が来たときにだけ触れるベクトボトル二本のうち、一本を抜き取った。

程なくしてグラスを乗せたお盆を持ってきた純に、翔子は告げる。

「雰囲気も何もあったものではないが、彼女にとって大切なのは早さなのだ。」

「今日は純ちゃんに大切なお知らせがあるの」

パタリと閉じた本の表紙が、今は心強い。

グラスがトンと置かれたのを合図に、彼女は本を胸に抱え、切り出した。

「今さっき、お兄ちゃんと別れて来ちゃった」

「えっ……？」

翔子の告白に、さすがの純も驚いたようだ。

反応を口にしてしまえばかりでなく、見開いた瞳も純にしては珍しい。

翔子とて彼女の異常に気付いていたが、止めどなく話してしまっ。

「私ね、他に好きな人ができちゃったの」

グラスを置いた姿勢のまま立ち尽くす純に、間を置くことなく続ける。

「純ちゃん、純ちゃんが好きなの」

翔子は真っ直ぐと真ん中に投げ込む。

対する純は、見事に——

「……？」

——あ——っ！

「何っ？」

「お兄ちゃん!？」

とんでもない叫び声に、翔子は一気にドアノブを下げ、突入。

純も声に反応して、壁から跳ねるようにして部屋に入る。

果たして二人が見たのは、悲鳴の主の他、後ろ手でべたん座りの菜々だ。

光景から状況を察した翔子は、迷いなく行動を取った。

——ダンッ

「あんた何してんのよ！ 相手は中学生よ？ バッカじゃないの？」

全力で振り抜いた右ストレートは頬を捉えた。仰け反った彼に罵声を浴びせると、次いで呆然としたままの菜々に声をかけている。

「菜々ちゃん、菜々ちゃん大丈夫？」

どこを見ても定まらなかった瞳が、声に応じて翔子を映す。

眼鏡の向こうで涙が溢れるのを見て、翔子は菜々に微笑んだ。

落ち着きを取り戻した菜々から語られた事実には、翔子は多少の後悔を覚えていた。

「純ちゃんの家に来る理由、欲しかったから……」

「ダメだよ、断らなくちゃ。見た目を変えたって、あいつの行動が変わるわけじゃないんだから」

「ごめんさい……」

しゅんと俯く彼女の元に、差し出されたのはオレンジジュース。

「どうぞぞ」

翔子に促され立ち上がった純は、鞆の中を探っている。取り出したのは眼鏡だ。

「あれ？ 目、悪いの？」

「そうじゃないんですけど。道を覚えられないので」

夕方に会って以降、菜々が眼鏡をかけていることはなかった。

故に翔子は聞いてみたが、どうも話が噛み合わない。

「ん？ 見えないから？」

「えっと、かけてみればわかると思うんですけど……」

身長差から少し掲げるようにして、菜々は翔子に眼鏡をかける。

そして取り出したのは、携帯電話である。トントンとタッチパネルを操作すると、声を上げたのは翔子だった。

「おおお？ 何か映ってるよ！」

「ということですよ。携帯のディスプレイなんです」

「世の中、進んでるんだねえ。パッと見普通の眼鏡だよ？」

翔子は眼鏡を外すと、眼鏡の四方をまじまじと眺めた。

確かに、通常のセルフレームにしか見えない。

「少し重たいんですけどね。昔と違って、外見じゃわからないと思います」

「わかんないよねえ、世の中ハイテクだねえ。ほら、純ちゃんも試してみなよ」

「う、うん、じゃあ……」

彼女は手の上の眼鏡にひとしきり感心して、純にかけた。

「うあー、翔子さんが猫さんだよ！」

「はいい？」

「人の顔を猫の顔に置き換えてるんです。こういう使い方はあまりしませんけど」

先ほどまでのアダルトな雰囲気はすっかり消え去り、目新しい道具に感心しきりで、二人は帰途についた。

十

「たっだいまー」

今日も今日とて純の住まう家、中江邸に響くは翔子の声である。

「お帰りなさい」

一緒に帰ってきた純だが、彼女を迎えるよう挨拶した。

余所様の玄閼だというのに、靴の脱ぎっぱなしが当然の翔子である。今日も脱ぎ散らしたまま廊下を歩き——出すも、踵を返した。

「どうしたんですか？」

彼女の靴もあわせて整える純に、翔子が返した答えは指差してある。

「そのローファー、女の子のだよね？」

「……あ、気付きませんでした」

綺麗に掃除され、すぐに履かない靴は置かれていない三和土。いつもは三足だが、今日は四足。純も見慣れない靴が一足あった。

「新しい彼女、できたの？」

「お兄ちゃんですか？ どうでしょう、私はお会いしたことありません」

「そっか。どんな子だろうねえ？」

「……よくないこと、考えていますね？」

会話が進むたびにえくぼを深める翔子を見て、純が気付かぬわけはない。

見送った。

突然だったこともあり、純は言葉の意味すらわかっていないのだろう。そこで翔子は、言い方を変えた。

「小牧翔子は、中江純が好きです」

「……ええ？ 私？」

「うん、純ちゃんだよ」

今度は理解したようだ。言葉の真意まで、しっかりと。

しかし意味がわかろうとわからないことはある。彼女はお盆を持ち直して、翔子に聞き返した。

「あの、えっと……私、どうしたらいいですか？」

純は確かに、驚いているのだろう。しかし声は平然とし、顔色も変わらない。

翔子は目の前の彼女を見て、改めて思ったことを伝える。

「恋人同士、して欲しいな」

そして立ち上がり視線を合わせると、まだわからないことがあろう彼女に教えた。

「この本の二人みたいに、ね？」

抱いていた本を彼女に掲げる。

女の子二人が、優しく見つめ合っている。

「その通り、するんですか？」

「……しちゃった」

離れた顔を見つめ合うと、互いに意外な顔をしていて二人から

「あーもうっ、純ちゃん可愛いよおーっ」

やっぱり無言でいる純に、きゃあきゃあど騒ぐ翔子。

対照的な二人は今も変わっていない。

再び収まったソファの上での距離だって、今まで通り。

「ヒロインの二人みたいに、ゆっくり、仲良くなるう？」

翔子がくるとんと首を倒すと、純の肩に乗っかる。

「はい」

彼女がくくとんと頷くのを感じながら、翔子は早速「ゆっくり」を始めた。

「まずはもっと近づこう！ てことで、抱きついてみるー」

彼女はソファの弾力を利用してガバッと抱きついた。

真横から左腕でトップバストを、右腕で肩胛骨を経由させても、翔子の腕はまだ余るほどの体格差。がっしり抱きしめられては動きようもない。

しかし、純はあっさりと翔子を引き剥がす。

「邪魔です」

「えええええっ！」

彼女の冷え切った一言に、翔子は派手に仰け反り、演技か本気か涙目だ。

「なななななんですか？ 私のこと嫌い？」

一方の純は座る位置を直し、翔子に俯きがちの顔を向けた。

「だ、だって、立ち上がれないじゃないですか」

「そんなに私といたくないの？」

「御夕飯、作りたいんです」

「あ、なるほど」

翔子は納得すると、ほっと胸をなで下ろして、うるうるしていた瞳を袖で拭う。

その様を見て純は、ポケットからスッとハンカチを出した。

「こんなことで泣かないでください……」
 「ありがたい。でも、『こんなこと』じゃないよ。好きな人には嫌われたくないの！」
 「私はそう簡単に人を嫌ったりしません。好きにもなりませんけど」

「えー、好きになってよーっ」

翔子はソファの上で高座りをして、両手をぶんぶん振っている。純はもちろん、意に介さず腰を浮かせた。

「じゃあ、御夕飯作りますね。——きゃ、痛っ！」

しかし、悲鳴とともにまたソファに戻ってしまふ。

「……自分の髪に、手をつけてしまいました」

「解説いらなくて。純ちゃん、やっぱり可愛いっ！」

翔子はまたもや、純に抱きついた。

+

翌日の放課後、翔子が急ぎ向かった先は言うまでもない。

「帰宅部の大勝利ね」

我が身の幸運を口にしたがら、辿り着いたのは中学校前。

すでに放課の時間からだいぶ経ったようで、校門を出てくる生徒はあまりいない。帰宅部はその活動を終えており、多くの部活は未だ活動中と言ったところだろう。

後者の一員である純を待つべくやってきた彼女だが、寒空の下である。

（寒い……。そだ、中に入っちゃおうかな。制服、似てるしね！）
 早々に計画を変更して、校門をくぐった。

またたまらないんだよねえ。ねえ？」

翔子は熱視線を送りながら、隣の菜々に同意を求めている。

「純ちゃん、帰ってきたのに着替えないんですか？」

嫌らしい話題で絡む彼女に、菜々は相変わらずの調子で答えている。しかもその内容は、翔子の心を掴んでしまう。

「な、なんて恐ろしい子……。いきなりそこに気付くとわあっ！
 そうなのよ、純、着替えないのよねえ。だぼっとした部屋着とか見たいのに！」

「でも、お休みの日は、制服じゃないんですよね？」

「そうなんだけどねえ。結構キチツとした服着てて、帰ってきて

も外行きのままなの」

「純ちゃんらしい、かも」

「そりゃそうだけどもさあ」

翔子と菜々から純の後ろ姿が丸見えなのだ。当然、二人の会話は純に筒抜けである。

初対面とは思えぬ仲睦まじい会話に微笑みながらも、純は意図せず手を止めてしまった。

（明日から、着替えようかな……）

二人は純の小さな溜息に気付くことなく、今度は外行きの話で盛り上がっていた。

昨日より一人多い夕食を終えると、今日もお暇の時間。

「泊まっていけないんですか？」

隣で靴を履く翔子に菜々が聞いた。

すっかり打ち解けた様子だが、声が小さいのは変わらない。

「ホント、私たちは似てるのねえ。私も思った、泊まりたいと思

（うーんと、被服室はどこかしら。こっちなあ）

中学校に案内板などあるはずもなく、何となくで教室を探さずか不幸かすれ違う生徒はない。

階段を一度上がり、廊下を折れること二度、偶然にもあっさり
 と被服室を見つけることができた。

「ふっふっふっ、クールな純ちゃんも驚くに違いない」

改めて「被服室」の表示を確認すると、にやつく表情はそのま

まにガバツと扉を開く。

「純ちゃん、迎えに来たよーっ！」

翔子は大声の挨拶とともに室内へ突入。

中の状況を確認すると果たして彼女はいたが——

「誰っ!？」

「鍵かけなかったの？」

「へ、変質者？」

室内の空気は予想外だった。

それもそのはず。やはり穏やかでない視線を送る純は、いつになく露出度高めだ。

「あー、えっと、純ちゃん、べったんこだよねー。ははっ」

「はあ……。とりあえずその辺座っててください」

「え？ いいの？ わーい、じゃあこの辺で」

深い溜息とともに許された在室が、歓迎されたものでなくても翔子は気にしない。嬉々として近場の席に着いた。

周囲からの「あれ誰？」という問いにどう答えたのか、翔子の耳には届かなかった。しかし程なくして部活動が再開されたところを見るに、穏当な答えを返したのだろう。

「彼女って言うってもらえる日、来るのかなあ」

ったのよ！ でも、制服を脱がない純を見て、それを言える？」

「……言えません」

「でしょう？」

彼女たちの後ろには、もちろん、お客様を見送る純がいる。

（なんて話してるんですか……）

頬を赤らめながら苦笑する彼女に気付かないのか、話は続いた。
 「彼女としては、やっぱりお泊まりして、あんなことやこんなこともしたいじゃない？」

「したい、ですよ……」

「ねー。どんな下着を着けてるのかなーとか、お肌ふにふにかなーとか、気になるよねえ？」

気付いていた。少なくとも翔子は、気付いていた。

彼女は隣の菜々だけでなく、振り返って、純にも同意を求めた。

「わ、わかりましたっ。今度は泊まっていってください！」

「わーい。菜々ちゃんぐっじょぶ！」

「ありがとうございます。私としては、妬けますけど……」

菜々の言葉に、翔子も純も表情を硬くしたが——
 「でも、そんなお二人を想像しちゃうと、その、しちゃうと言っ

か……」

続きには、反応を変えざるを得ない。

翔子はもちろん、相手を崩し、バンバンと純の背中を叩いてい

る。

純の方は再び頬を紅潮させ、視線を外した。彼女の様子に、翔

子はさらに嬉しそうである。

「純ちゃんがいたたまらないようだから、行きましよう」

「はい。ちょっと待ってくださいね……」

純は目を白黒させながら、言われるがままに奥の椅子へと座り直す。

すると当然、隣には菜々が座った。

「あ、あの……」

ようやくと声をかけようとするも、向かいに座った翔子は、お構いなしに話を始めた。

「菜々ちゃんは今から私たちの友達。だから、一緒にお茶したり遊んだり、ね?」

「は、はい……。でも……」

勢いのある翔子の物言いに押される純だったが、そうそうあっさり納得はできない。

恋の告白に「ごめんなさい」を返しても、諦めることなくついてきてしまう菜々。純にしてみれば、彼女には得も言われぬ不安がある。

顔にも不安が書いてあった彼女を見て、翔子は軽やかに念を押している。

「大丈夫、ハッキリ言ったから。純ちゃんと私は付き合ってるし、純ちゃんの恋人は私だけ。それはわかってるよね?」

——こくん

「でも、恋人じゃなきゃ仲良くしちゃいけないなんてないもん。

片想いのまま、友達でいいじゃないかって、ないよね?」

「そう、ですね。でも、翔子さんにそういうことは言って欲しくありません」

「え? どうして?」

「素敵、だから。高田さんも翔子さんのことを好きになっちゃったら、どうするんですか?」

「純ちゃんを好きになる子だもん、大丈夫。それと! 『菜々ちゃん』だよ? 菜々ちゃんも『純ちゃん』だからね?」

「はい、わかりました。……菜々ちゃん?」

「はい、純ちゃん」

彼女の消え入りそうな声はいつもより小さかったけど、いつもより熱っぽかった。

純が帰宅すると、飛んできたのは嫌味だった。

「ここ、お前の家じゃないんだけど?」

「はいはい、大好きな元カノに会えて嬉しいのね」

もちろん、嫌味は純に飛ばされたものではない。真っ先に玄関に上がり、すかさず応じた翔子に向けられた矛だ。

もはや毎度の光景だが、菜々にとっては初めてである。同じく後ろで控えていた純に、傾げた首で問うている。

「お兄さん、ですか?」

「あ、うん。それで翔子さんは、お兄ちゃんの彼女だったの」

「そっか。お兄さん、か」

なんだか噛み合わない二人だったが、目の前の事態に比べればどうと云うことはない。純は菜々の手を取り、スッと翔子の横を抜ける。

「先が上がって」

「はい、ありがとうございます」

こうして今日も、賑やかな夕食時が始まった。

キッチンに立つのは純。そんな光景を眺めるのが翔子と、今日ももう一人、菜々である。

「制服にエプロンってのも、いいよねえ。エプロンが開く背中が

演劇の衣装だろうか、如何にもお姫様なドレスを着せられる純を見ながら、翔子は独りごちる。

その言葉を聞きつけたわけではないだろうが、一人の生徒が彼女の方にやってきた。

「あの、済みません。お願いがあるんですけど……」

「何?」

翔子の口調は今日も気さくだったが、さすがに初対面。目の前の少女は改まった姿勢のまま、お願いを口にする。

「試着に協力していただけませんか。背の高い人、私たちの中にはいないので」

「喜んで。どんな服なの?」

「うーん、見てもらうのが早いと思います」

少女に連れられ、純を含む数人が待つ一角へ。

同時に室内で繋がった隣の部屋から、衣装を持った生徒が現れた。

「魔法少女だそうですよ。ウエスト67センチですけど、大丈夫ですよね?」

「言わないと、ダメ?」

翔子はちらっと純に視線を送る。

自己申告がないなら測らんとする生徒がメジャーを構える中、純からの答えも似たようなものだった。

「はい。サイズが合わなければ着せられません」

「冷たいなあ。67ならびったりだよ、鯖読みなしで」

「ありがとうございます。じゃあ服を脱いでいただけますか」

相手は中学生とは言え、毎日服を作っている子たちだ。

翔子が服を脱ぐと、手際よく採寸し服を着せた。あっという間

にできあがったのが、魔法少女の翔子ちゃんである。

「胸のサイズだけはあってないんですが……。どうですか?」

「びったり。悔しいけどウエストはちょっとキツイ。太ったのかなあ……」

雰囲気飲まれるとはこのことで、翔子もすっかり、真摯に問いに答えていた。

「服の方がキツめに作ってあるんです。ウエスト締めて、胸を出す衣装ですから」

「なるほどね」

風変わりな服を着た翔子は、くるりと回ったり、いくつかポーズを取ったりしている。

「コスプレやる人の気持ち、何となくわかるかも」

「それなら、もう少しやってみます? お姫様とのキスシーンがクライマックスですよ」

「うあー、ベタだねえ」

「でも、受けるんですよ。自分で言うのも何ですが、年頃の女の子ですから」

説明してくれた彼女は、さーっと台本をめくり、該当の箇所を指差して翔子に渡した。

翔子は科白を確認しながら、すでに「やりません」という顔をしている純に問うた。

「純ちゃん、やる?」

「遠慮しておきます。翔子さんはキスしたいんでしょうけど」

答えは案の定の拒否に加えて、冷たいお言葉付きだった。取り付く島もなさそうで、翔子は肩を竦め、わざとらしい溜息をついた。

「あーあ、残念だなあ。キスしたかったなあ」

翔子が再び寒空の下で待っていると、今度はちよこちよこ生徒が下校していく。純のところだけでなく、多くの部活動が終了の時刻を迎えているのだろう。

(さすが中学生、髪黒いなあ。スカートも長いよね)

通り行く彼女たちを観察していたところ、ふと純が目の前に現れた。

「来た来た。帰ろっか」

「はい」

翔子が出した左手に、純は右手を重ねた。

「純ちゃんの手、冷たい」

「翔子さんの手が暖か過ぎるんです」

「やっぱり？ カイロ握ってたからねー。ほらっ」

翔子はくいつと純の手を引き寄せ、自分のコートのポケットに入れる。

「暖かいでしょ？」

「暖かいです」

少しやり過ぎたかなと翔子は思ったが、純の一言に安堵した。

それどころか、ぴったりとくっついた彼女から、もう一言、発せられた。

「翔子さんの身体も、暖かいんですね」

「こらこら、そんな可愛いこと言っちゃダメだぞー。いろいろしたくなっちゃうから」

翔子の瞳に映るのは、多分に漏れず黒髪の伸びる頭だけ。しかし容易に想像できる純の表情に、彼女は謝らざるを得ない。

2

運ばれてきたコーヒーが二人の間に並べられる。

ウェイトレスが去っても、少女はコーヒーには手も付けず、溜息混じりで話している。

「ごめんなさい。『諦めません』って言って聞いてくれないんです……」

一方、向かいの彼女は、大量の砂糖に続きミルクをカップに投入しながら、気さくな声で応じた。

「いいっていいって。純ちゃんが悪いわけじゃないんだから」

「でも、せっかくの翔子さんとの時間なのに」

「ありがと。私との時間かあ、そんな言葉が聞けるのは彼女のおかげかな」

「もうっ！ 私は本当に、残念なんですから」

またまた溜息をつく少女、中江純。

コーヒーをつやつやの唇に運ぶ、小牧翔子。

二人が何度目かの視線を送ったのは、店の奥だった。

「菜々ちゃんだっけ？ 綺麗な子だよええ。同級生なの？」

「はい」

「男の子に人気あるでしょう？」

「そう、ですね」

「端正な顔、黒髪ツインテール、そして大きすぎる胸。まるで妄想上の生き物」

「でも、本人は全然興味ない風だったんです。……本当に興味がなかったんですね」

「男の子ではなく女の子、純ちゃんが好きだった、と。中学生で

「ごめんね、そんなつもりじゃないってわかってるんだけど」
翔子の言葉を聞くと、純は手を解いて数歩先へと走り、振り返る。

「私もわかってます、翔子さんがそういう人だって」

街灯に照らされた純の、顔が、太腿が白く眩しい。

翔子は彼女を見て、突然駆け寄った。

「慌てなくても逃げませんよ」

僅か数歩を飛んできた翔子に純が告げるも、彼女は行動を止めない。

翔子は勢いをそのまま下方に向け、純の目の前でしゃがみ込んだ。

そして、コートの裾を小さくめくる。

「っ！」

純の瞳が見開かれたとき、彼女の反応とは逆に、コートの裾は戻された。

「純ちゃん、スカート、どうしたの？」

「あ、着てくるのを忘れた。だから寒かったんですね」

「もっと慌てなさいよ！」

翔子が見上げると、いつも通りの純が見えた。

「純ちゃんって実は、天然さんなのね」

苦笑いをする翔子に純が返したのは、きつとわからない言葉。

「翔子さんはやっぱり、優しいんですね」

やはり彼女が不思議そうな顔をした虚を突いて、再び走り出す。

「私のパンツ、見たいでしょう？」

すぐに追ってくる足音を聞いて、純はコートの裾も気にせず、思い切り走った。

同性に告白かあ、勇氣あるなあ」

二人の視線の先に座っているのは、純と同じ制服を着た、一人の少女。高田菜々だ。

出されたコーヒーには目もくれず、向こうは向こうでこちらを見つめている。もちろん、見つめる先は純である。翔子についてはコーヒーと同じ存在なのだろう。

翔子自身もそのことには気付いていたが、見られているつもりなのは性格のなせる技だろうか。気にせず手を振っている。

「菜々ちゃん、きつといい子だよ」

「え？ どうしてですか？」

「純ちゃんだって、嫌いじゃないでしょう？」

「それは、だって、嫌う理由がありませんから」

「ふふっ、それだけじゃないと思う。ちょっと待ってて」

「え？」

純が聞き返すように翔子を見ようとしたとき、彼女の顔はもう、そこになかった。

人の少ない店内、翔子は真っ直ぐに目的地へと向かう。あっさりと菜々の対面に座って何やら話し出した。

程なくして、クエスチョンマークを頭に浮かべていた純は、エクスラメーションマークを浮かべるようになった。

戻ってきたのは一人だけではない。

「純の隣がいい？ 向かいがいい？」

純が座るテーブルの前で、翔子が問いかける相手は菜々だ。

「隣」

「だよえー。好きな人の隣って、憧れだもんね。ほら、純ちゃん、奥に入って」